

(3) カルデシズムの場合

カルメンは46歳の女性でPL教団に入信するまでの6年間、カルデシズム (Vol.15 No.3～No.8)に通っていた。きっかけは背中に痛みを感じて医者に見てもらったが病気ではないと診断されたことからだった。カルデシズムでは、それはエスピリト(霊、魂)に原因があり、彼女自身のエスピリトを成長させることで治るといわれた。そして、手かざしによる霊的治療であるパッセを受け、教理を勉強するうちに痛みがなくなるようになった。元来東洋思想に興味があった彼女はヨガ教室や生長の家にも行ってみた。しかし、何かが欠けていると感じていた。

カルデシズムでは信者が自身の自覚のもとでエスピリトの進化を探求します。PLでは時には兄弟のように時にはセラピストのように信者同士で声を掛け合って親交を深めます。それによって、お互いのつながりが生まれるのです。カルデシズムにはそのようなつながりがないわけではないですが、PLに比べると非常に弱いように思います。私にはカルデシスタたちは閉鎖的で自分のことを中心に考えているように思えます。また、セントロ(活動の拠点)ではPLのような個人指導はありません。霊媒に悩みを聞いてもらってその原因がなんであるかを判断してもらいます。パッセを受けたり勉強会に参加したり、時には慈善活動に参加するようにと指示してもらっても、私自身の心が落ちつけるようになるにはどのような心構えをすればいいかということは教えてもらえませんでした。

それにカルデシズムでは信者の体験発表がありません。体験発表は、発表する人にも聞く人にも価値があると思うのです。ある人の体験は、似たような体験で悩んでいる人のヒントになるからです。カルデシズムでは本から学んだことを実践に移す努力をするようにと説かれるのですが、全ての人が実践できるほどの精神的、あるいは物理的な準備ができていたわけではありません。PLの場合には、教会に来て教師や補教師の指導を受けたり講話を聞いたりして、献身(みささげ)で身体を使います。そのことを通じて道が開かれるようになるのです。教会で学んだことを自分自身で分析して、体験することができるのです。多くの人と共に体験する中で理解を深めることができるのです。

彼女はカルデシズムの拠点を閉鎖的かつ個人的だと感じ、PLは開放的で共感的な場を提供すると理解しており、救済を得るうえで他者との共感を求めていたとみられる。このような思考様式は、救済における共同性への志向と呼ぶことができるだろう。彼女は生長の家にも数回行った経験があるという。しかし、そこでもカルデシズムやヨガと同じように救済は個別にもたらされる場所だと感じた。すなわち、彼女にとってそれらの宗教(的)施設は救済における個別性への志向が強いということになる。

さて、彼女が指摘するように「体験発表」は信者にとって教団の魅力になっているが、「解説」と呼ばれる個別のオリエンテーションも見逃すことはできない (Vol.16 No.7)。これは、信者の苦悩(「みしらせ」)にたいして行われる組織的な信者育成システムの一環で、教団の最高権威である教主(おしえおや)から直接下された「みおしえ」に基づいて各拠点の指導者的立場の者が行う。そこでは、日常生活の指針や目標、そして安心の根拠が個別に与えられる。

また、彼女は教会活動にも熱心で献身(みささげ)を積極的にやっているという。PLの教会に行くと、トイレ掃除や窓ふきといった施設整備に携わる信者の姿を見かける。信仰活動として清掃等を行う姿は天理教のひのきしんに通じるところがある。そこでは同じように活動している信者の間に連帯感が生まれやすい。他者と価値観を共有することのできる場があることは、とりわけ匿名的な都市社会を生きる住人にとって重要だと言えるだろう。

「解説」でPLの教えを生活指針として学び、「体験発表」で学んだ教えの具体的な展開を披瀝・参照する。そして学んだ教えを「献身」で実践するというように信者育成システムが構造化されている。PL教会では朝から晩まで、ほぼ一日中献身しながら過ごす信者がいるが、それはこうした教えの獲得と実践が教会という場において展開しているからに他ならない。

さて、カルメンのPL教団との出会いは次のようである。法学部を卒業した彼女は弁護士の仕事をしていたが業績がふるわなかった。友人と共同で法律事務所を始めたが、うまくいかなかった。弁護士を辞め、苦渋の選択で不動産業を始めることになった。しかし、自分のキャリアと現実の仕事の間のギャップを受け入れることができず、不動産業という商売を卑下するようになった。歯車がどこかズレているように感じていたという。そのころ彼女はPLの教えに出会った。

高校を卒業しただけの人なのに、私よりもずっと社会的に高い地位を得ている人がいる。私はずっと努力して勉強してきたのに、社会上昇ができていない。それはどうしてなのかと考えていました。しかし、私はPLで障害を取り除いて成長したいと思うようになりました。障害というのは私自身の「心癖」です。社会上昇できないのは私の心癖が原因だからです。ミオシエ願いをすると、必ず「強情」と書かれています。確かに私は強情でしたし、今もそうです。私は、人間は正しく生きなければいけないと考えて、人にも自分にも厳しくしてきました。完璧主義だったのです。教会長には、人間は一人一人が神業で造られたと聞かされました。だから、私たちは神業を批判することはできないのです。にも関わらず私はそれさえも批判して否定さえしてきました。

以前は神様に「あんなって欲しい、あのようになりたい」と願っていました。私が、他人のことや自分のことを全て前もって決めてしまっていたのです。私は間違っていました。全ては神様が決めて下さることだと思いうまに私は変わってきました。友人達は私が強情だと言ってきましたが、強情が持っている意味の深さを私は分かりませんでした。しかし、PLに入会して、強情のどこが間違っているのかが分かるようになってきました。強情の何が私の人生に影響を与えているのかが分かるようになりました。

元カルデシスタだった彼女は、災いの原因は神の領域までも変えてしまおうとする彼女自身の身勝手な「強情さ」にあったと反省するようになった。そのような考え方は、外在する霊が災いも救済ももたらすと説くカルデシズムの考え方よりも彼女には説得的だった。カルデシズムで感じることをできなかった信者同士の連帯感や、教師の個人指導という対面接触的なつながりがPLへの魅力を生んだとはいえ、こうしたPLの教えを内面化することによって救われているという感覚を獲得していったのである。